αM プロジェクト 2020 企画　プレスリリース

時下、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。
この度、gallery αMでは、αMプロジェクト2020として二つの展覧会を開催いたします。
つきましては、以下に展覧会の概要をお知らせいたしますので、ご高覧いただけましたら幸いです。

ゲストキュレーター企画：

約束の凝集

Halfway Happy

ゲストキュレーター：長谷川新
2020年4月25日〜2021年2月13日
参加作家：曽根裕、永田康祐、黑田菜月、荒木悠、高橋大輔
協力：ANOMALY, Tommy Simoens

αMプロジェクト企画：

αM+ vol. 2 「わたしの穴　美術の穴」

αM+ vol. 2 My Hole: Hole in Art

2021年2月23日〜3月20日

主催：武蔵野美術大学　運営：武蔵野美術大学αMプロジェクト運営委員会
会場：gallery αM　ギャラリーアルファエム
〒101-0031 東京都千代田区東神田1-2-11アガタ竹澤ビルB1F
tel：03-5829-9109　fax：03-5829-9166
日・月・祝休（ただし、2/23と3/20は開廊いたします）　13:00 〜 20:00（2020年度は開館時間を変更いたします。）
https://gallery-alpham.com/

オリンピック期間には交通事情等により鑑賞者やスタッフの往来が困難になることを考慮し、ゲストキュレーターと協議のうえ休廊期間を設けることにいたしました。この期間は「サバティカル」と称されており、アーティストやキュレーター、スタッフそれぞれにとって単なる「調整期間」ではないかたちで前向きに捉え直すことが目指されています。
また、皆さまにお越しいただきやすいように、本年度は試験的に開廊時間を13:00〜20:00に変更することにいたしました。
より多くの方にご来廊いただけましたら幸いです。

ぜひ多くの方にご高覧いただきたく、本企画の周知・広報にご協力いただけましたら幸いです。よろしくお願い申し上げます。

※コロナウイルス等の影響次第ではイベントや開催時期など変更の可能性があります。その場合はできるだけ早い段階でウェブサイトなどで告知いたします。

■展覧会に関するお問い合わせ、取材依頼等は下記までお願いいたします■
gallery αM　ギャラリーアルファエム
alpham@musabi.ac.jp
〒101-0031 東京都千代田区東神田1-2-11アガタ竹澤ビルB1F
tel：03-5829-9109　fax：03-5829-9166

αMプロジェクト2020

約束の凝集

Halfway Happy

ゲストキュレーター:長谷川新
協力:ANOMALY, Tommy Simoens

デザイン:熊谷篤史

会期

vol. 1 曽根裕
2020年4月25日(土)～6月13日(土)

vol. 2 永田康祐
2020年8月22日(土)～9月26日(土)

vol. 3 黒田菜月
2020年10月7日(水)～11月7日(土)

vol. 4 荒木悠
2020年11月18日(水)～12月19日(土)

vol. 5 高橋大輔
2021年1月9日(土)～2月13日(土)

日・月・祝休　13:00 ～ 20:00

キュレーターズノート (2020.1.16)　長谷川新

2018年の暮れ、「αMでゲストキュレーターをしませんか」と連絡をうけて最初に考えたことは、「絶滅」についての展覧会だった。風の谷のナウシカの原作漫画を繰り返し読んでいて、タイトルは仮で「ノーマンズランド」とつけていた。それはとても暗いように見えるけれど、別に悲観的であるわけではなくて、むしろそれを避けてアートはできないんじゃないか、という中途半端にリアルな手応えに基づいたものだった。他方で、できるだけ具体的であろうとも考えていて、開場時間を13時～20時へと変更したり、初日のアーティストトーク(とその文字起こし)をやめてカタログをもっといろんな読み方ができるようにしようとか、オリンピックシーズンの鑑賞/労働条件を鑑みて、展示はせずに別の時間の使い方ができるようにしよう、と決めたりもしていた。このちぐはぐさはなんなのだろう、と自分でもよくわからなかった。でもいまははっきり書けることがある。

各位が培ってきた技術は、「妥協」のために、つまりは部分的であったり矮小化されて行使されるべきではない。アートは、「アートなんて無意味だ」とか「どうせいつか死ぬ」とかいう地点にたどり着いてしまってから、むしろそこから、そこをどう折り返して、還ってくるか、という、いわば「帰還の技術」の連続である。虚無と相対化の荒野は、到達地点であったとしても、目的地では決してない。無意味かもしれない、けど、やりたいんだ、と踵を返す。

妥協を「約束の凝集(Com-Promise)」として、途方もなく前向きに考える。それが妥協ではなく約束の凝集である限り、そこには未来の時間が含まれている。今回のαMは、5人のアーティストが、自分が生きて死ぬ時代に、それぞれのやり方で、未来を確信する技術の、研鑽と共有です。

αMプロジェクト2020　ゲストキュレーター プロフィール

●長谷川新（はせがわ・あらた）
インディペンデントキュレーター。1988年生まれ。京都大学総合人間学部卒。「北加賀屋クロッシング2013 MOBILIS IN MOBILI -交錯する現在-」（2013-2014、大阪、東京、金沢）のチーフキュレーターを務める。主な企画に「無人島にて—「80年代」の彫刻/立体/インスタレーション」（2014、京都）、「パレ・ド・キョート/現実のたてる音」（2015、京都）、「クロニクル、クロニクル！」（2016-17、大阪）、「不純物と免疫」（2017-18、東京、沖縄、バンコク）、「STAYTUNE/D」（2019、富山）、「グランリバース」（2019-、メキシコシティ）など。美術評論家連盟会員、国立民族学博物館共同研究員、日本建築学会書評委員、日本写真芸術専門学校講師、PARADISE AIR ゲストキュレーター。

αMプロジェクト2020　作家 プロフィール（会期順）

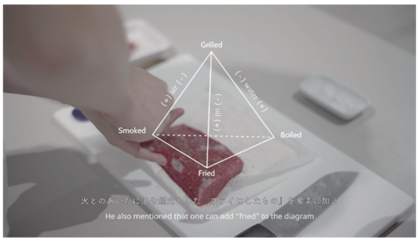
●曽根裕（そね・ゆたか）
1965年生まれ。中国、メキシコ、ベルギーにて活動を行う。主な個展に「Obsidian」四方当代美術館（南京、2017年）、「Day and Night」David Zwirner（ニューヨーク、2016年）、「Perfect Moment」東京オペラシティアートギャラリー（東京、2011年）、「Like Looking for Snow Leopard」Kunsthalle Bern（ベルン、2006年）など。主なグループ展に、「東京インディペンデント」陳列館（東京、2019年）、「Sanguine: Luc Tuymans on Baroque」プラダ財団（ミラノ、2018年）、ホイットニービエンナーレ（ニューヨーク、2004年）、「ヘテロトピアス（他なる場所）— 曽根裕　小谷元彦」第50回ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館（ヴェネツィア、2003年）、「ダブルリバー島への旅」豊田市美術館（愛知、2002年）、「EGOFUGAL」第7回イスタンブール・ビエンナーレ（イスタンブール、2001年）、「移動する都市」（ウィーン、ボルドー、ニューヨーク、フムレバク、ロンドン、バンコク、ヘルシンキ、1997-1999年）、第4回ミュンスター彫刻プロジェクト（ミュンスター、1997年）など。

「Hong Kong Island (Chinese)」
1998年 | marble
Images courtesy of the artist

「Still from Night Bus」
1995年 | video installation | 15 mins
Images courtesy of the artist

「Tropical Composition / Agave」
2019年 | reed, stainless steel, acrylic paint
Images courtesy of the artist

●永田康祐（ながた・こうすけ）
1990年愛知県生まれ。社会制度やメディア技術、知覚システムといった人間が物事を認識する基礎となっている要素に着目し、あるものを他のものから区別するプロセスに伴う曖昧さについてあつかった作品を制作している。主な展覧会に『あいちトリエンナーレ2019：情の時代』（愛知県美術館、2019）、『オープンスペース2018：イン・トランジション』（NTTインターコミュニケーションセンター、2018）、『第10回恵比寿映像祭：インヴィジブル』（東京都写真美術館、2018）などがある。また、主なテキストとして「Photoshop以降の写真作品：「写真装置」のソフトウェアについて」（『インスタグラムと現代視覚文化論』所収、2018）など。



「Translation Zone」
2019年 | 4Kヴィデオ | 27'22"

「Sierra」
2017年 | MacOSアプリケーションによる映像 | 12'00"

「Audio Guide」
2019年 | 音声ガイド | 17'22"
撮影：高橋健治
画像提供：Tokyo Arts and Space

●黑田菜月(くろだ・なつき)

1988年神奈川生まれ。2011年中央大学卒業。2013年8回写真「1_WALL」にてグランプリを受賞。主な展覧会に、2014 「けはいをひめてる」(ガーディアン・ガーデン / 東京)、2017 「わたしの腕を掴む人」(ニコンサロン / 東京)、2018「友だちの写真」(OGU-MAG / 東京)などがある。また、2016年からは横浜市立金沢動物園にて毎年行われているメディアアート展「ひかるどうぶつえん」に参加。2019年には同園にて写真と映像のグループ展「どうぶつえんの目」(横浜市立金沢動物園 / 神奈川)を企画した。

「けはいをひめてる」
2014年 | 発色現像方式印画

「わたしの腕を掴む人」
2017年 | 発色現像方式印画

「友だちの写真」
2018年 | ビデオ | 27'59"

●荒木悠(あらき・ゆう)

1985年山形県生まれ。大学で彫刻を、大学院では映像を学ぶ。再演・再現・再解釈といった手法を軸に、ある事象や文化的象徴の真正性を問う映像インスターレションを展開している。主な個展に「RUSH HOUR」(CAI02／札幌 2019)、「ニッポンノミヤゲ」(資生堂ギャラリー／東京 2019) 、「双殻綱:第一幕」(無人島プロダクション／東京 2017)、「複製神殿」(横浜美術館アートギャラリー1／横浜 2016)。近年の主なグループ展に「The Island of the Colorblind」(アートソンジェ・センター／ソウル 2019)、「Future Generation Art Prize」(ピンチューク・アートセンター／キエフ 2019)、「The Way Things Do」(ジョアン・ミロ財団現代美術研究センター／バルセロナ 2017)、「岡山芸術交流 2016: Development」(旧後楽館天神校舎跡地／岡山 2016)など。

「LOST HIGHWAY (SWEDED)」
2018年 | 映像インスタレーション
ボルボ スタジオ青山での展示風景

「双殻綱」
2019年 | 映像インスタレーション
ピンチューク・アートセンターでの展示風景

「The Last Ball」
2019年 | 映像インスタレーション
資生堂ギャラリーでの展示風景 | 撮影＝加藤健

●高橋大輔(たかはし・だいすけ)

1980年埼玉県越谷市生まれ。比企郡小川町在住。画家。2005年、東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒業。一般的な油絵の概念を超えた厚塗りの絵画を手掛けることで知られる。作品はすべて油絵具を使用しており、また完成予想を設定しない、独自のメソッドで創作を進める。2016年、埼玉県立近代美術館での企画展「迫り出す身体」では約70点を超える新作をインスタレーションし、話題となる。近年は西欧絵画などに限らず、日本の洋画、日本画、書へもアプローチした、多様な作品展開をみせている。近年の主な展示に「絵画の在りか」東京オペラシティーギャラリー(2014)、「ペインティングの現在-4人の平面作品から-」川越市立美術館(2015)、「NEW VISION SAITAMA　迫り出す身体」埼玉県立近代美術館(2016)、「眠る絵画」URANO、viewing space、(2018),「自画像」Art Center Ongoing (2018)「太田の美術vol.3　2020年のさざえ堂　現代の螺旋と100枚の絵」太田市美術館・図書館(2020)など。現在、東京造形大学非常勤講師。

「11」
2015-2016年 | 39.2×54.3cm | oil on panel
撮影:椎木静寧
Courtesy of ANOMALY

「無題(イビ)」
2012-2013年 | 30.5×40.0cm | oil on wooden panel
撮影:加藤貴文
Courtesy of ANOMALY

「無題(ワタシサシガタカハシ)」
2012-2014年 | 104.0×77.0cm | oil on wooden panel
撮影:椎木静寧
Courtesy of ANOMALY

αMプロジェクト2020

αM+ vol.2 わたしの穴　美術の穴

αM+ vol. 2 My Hole: Hole in Art

会期：2021年2月23日（火・祝）〜3月20日（土・祝）
日・月休（本展期間中は祝日も開廊いたします。）　13:00 〜 20:00

「わたしの穴　美術の穴」は石井友人・高石晃を主要メンバーとした、リサーチベースの自主企画展シリーズです。「わたし」という個を前提としたものと、「美術」という社会化されたものの双方が依って立つ基盤について思考するため、「わたしの穴　美術の穴」はそれまで自明のものと見做してきた制度や歴史を検証してきました。
石井・高石は「穴」を透明化された日常の基盤を認識するための方途として捉え、さらに基盤の表層の下まで貫かれた「穴」では、基盤の深層が日常空間へと噴出し、人間と社会、両者における顕在領域と深層領域の未分状態が発生すると解釈し、「わたしの穴　美術の穴」シリーズのモチーフとしています。
そのような「穴」の先例として、榎倉康二・高山登・藤井博らが1970年に行った野外展「スペース戸塚 '70」をリサーチの主な対象としてきました。彼らが高山の下宿先の庭に作品として掘った穴を、1970年の日常の基盤に穿たれた「穴」と捉え、1970年前後の文化的状況を含めて検証しました。そして、2010年代以降を生きる現在のわたし達にとって「穴」とはいかなるものとして存在しうるのか構想しています。
2021年にαM+で開催予定の展覧会では、これまでの検証を踏まえた上でより大きな時空間の中で「穴」を捉え直すため、既定の「わたしの穴　美術の穴」メンバーに限らないアーティスト・リサーチャーとの共同作業を予定し、構造が異なる複数の「穴」が交錯する多孔空間の出現を目標とします。

石井友人・高石晃

αMプロジェクト2020 作家プロフィール
●わたしの穴　美術の穴（わたしのあな　びじゅつのあな）

2014年「わたしの穴　美術の穴」発足
2015年 展覧会「わたしの穴　美術の穴」開催, Space23℃
　　参加：石井友人・榎倉冴香・地主麻衣子・高石晃・桝田倫広
2016年 冊子『わたしの穴　美術の穴』出版
　　ブックフェアー「1970年の穴から現在を覗く」開催, NADiff
2017年 藤井博「わたしの穴　21世紀の瘡蓋」開催
　　参加：石井友人・高石晃・藤井博
2019年「わたしの穴　美術の穴」2019年企画にて
　　榎倉康二・高山登・藤井博「不定領域」, Space23℃、
　　石井友人「享楽平面」, CUPSEL、
　　高石晃「下降庭園」, clinic を開催
　　参加：石井友人・高石晃・高山登・藤井博
　　冊子『わたしの穴　21世紀の瘡蓋』出版

1.

2.

3.

1.「わたしの穴　美術の穴」2019年企画（第3回展） 展示風景 石井友人　「享楽平面 A」2019年｜カラープリント｜170x120cm
2.「スペース戸塚 '70」記録写真 上から 榎倉康二　「湿湿」, 1970年、高山登　「ドラマ地下動物園 2」, 1970年、藤井博　「波動B」, 1970年
3.「わたしの穴　美術の穴」（第1回展）展示風景　高石晃　「two rooms and staircase」 2015年｜W130xD100xH200cm｜紙にインクとアクリル・穴　photo: Takuma

αM+（アルファエムプラス）は、ゲストキュレーターによる年約５本の展覧会と連動させながら、αMプロジェクトの独自企画として年１本の展示を開催するものです。創立30周年を迎えたαMは、発足当時の「オルタナティブ」つまり「既存のものに替わる新しい可能性」という理念に立ち返り、現在生まれつつある新しい活動形態の動向を見据えながら、さらに柔軟で拡がりのあるギャラリーを目指し、2019年度よりαM+を始動しました。